

三重県における令和4年度のスモン検診結果

南山 誠 (国立病院機構鈴鹿病院脳神経内科)
久留 聡 (国立病院機構鈴鹿病院脳神経内科)
木村 正剛 (国立病院機構鈴鹿病院脳神経内科)
野田 成哉 (国立病院機構鈴鹿病院脳神経内科)
村上あゆ香 (国立病院機構鈴鹿病院脳神経内科)
平野 聡子 (国立病院機構鈴鹿病院脳神経内科)
鬼頭 大志 (国立病院機構鈴鹿病院脳神経内科)
橋本 美沙 (国立病院機構鈴鹿病院脳神経内科)
酒井 素子 (国立病院機構鈴鹿病院脳神経内科)
小長谷正明 (国立病院機構鈴鹿病院脳神経内科)

研究要旨

三重県における令和4年度スモン検診の結果からスモン患者の現状を明らかにするため、検診を希望された11名の患者についてスモン現状調査個人票を用いて、受診状況と身体状況、日常生活状況について集計分析し、令和3年度に報告した推移と合わせて比較考察した。

高齢化が進み県内患者数は16名となり1名減少したが、検診は昨年と同じ患者11名に施行することができ、検診受診率は68.8%となった。昨年度は新型コロナウイルス感染流行に伴い3名を電話検診に切り替えさせていただいたが、本年度は全員に直接検診を行うことができた。平均年齢は85.2歳で男性3名、女性8名であった。

身体的併発症について、糖尿病は70歳以上の一般人口で約20%みられるところゼロであった。骨折に関しては有症率27.2%で80歳以上の一般高齢者と比較し同等と考えられた。

スモンの主症状について見ると、視力については発症時に比べやや回復された方、不変、など様々であるが、その後加齢とともに低下の傾向が示された。胃腸症状については、便秘36.4%、下痢9.1%、交代性36.4%、腹痛9.1%あり過去の検診においても同様の症状が持続していた。異常知覚については、じんじん・びりびり感が54.5%、足底付着感が27.3%の患者で見られ、病初期に比べれば症状は軽減しているものの残存している方が依然多くみられた。歩行能力についても他の主要症状同様、症状極期からある程度回復後に加齢とともに再び低下してきている。精神症候に関しては認知症の見られる患者が漸増しており、自覚症状の評価が不能となりつつあることがわかった。また不眠が54.6%の患者に見られ、スモンが影響を与えているのか一般高齢者との比較考察が必要である。日常生活状況についてBarthel Indexを見ると、2016年以後に低下が目立ち、本年度も3名の患者の低下が認められた。

本年度はスモン検診受診者の減少なく、コロナ禍ではあるが各保健所のご協力のもと直接の検診を全員に行うことができた。平均年齢は85.2歳となり、身体能力とともに日常生活レベルの低下が見られ、認知症にて自覚症状の評価が困難な患者が増加している。過眠を含めた睡眠障害をきたしている患者は72.7%に見られ、スモンの影響について検討が必要である。本研究は、現在生存されている比較的軽症の患者を見ているものと考えられ、スモン患者全体の病状と推移を捉えたものではないため留意が必要である。

A. 研究目的

三重県における令和4年度スモン検診の結果からスモン患者の現状を明らかにする。

B. 研究方法

検診を希望された11名の患者についてスモン現状調査個人票を用いて、受診状況と身体状況(視力障害、胃腸症状、異常知覚、歩行障害)、日常生活状況について集計分析、令和3年度に報告した5年ごとの推移と合わせて比較考察した。

(倫理面への配慮)

本研究は、国立病院機構鈴鹿病院の倫理審査委員会において承認を得た。

C. 研究結果

高齢化が進み県内患者数(健康管理手当等支払者数)は16名となり1名減少したが、検診は昨年と同じ患者11名に施行することができた。検診受診率は68.8%であった。昨年度は新型コロナウイルス流行に伴い3名を電話検診に切り替えさせていただいたが、本年度は全員に直接検診を行うことができた。受診形態は在宅訪問が45%、施設訪問36%、各保健所に来院いただいた施設来院が18%であった(図1)。平均年齢は85.2歳で男性3名、女性8名であった(図2)。

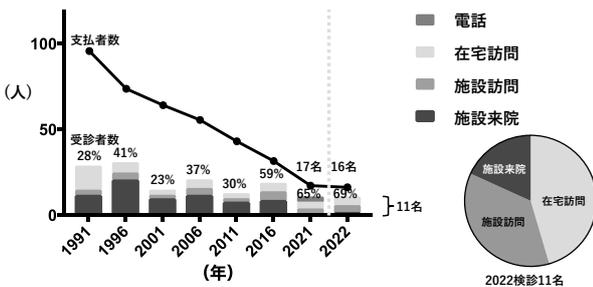


図1 三重県における健康管理手当等支払者数と検診受診者数

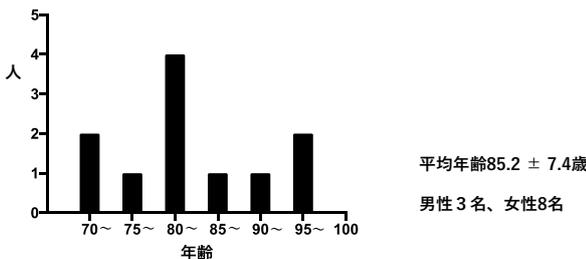


図2 令和4年度三重県スモン検診参加者11名

昨年に引き続き検診患者11名の身体的併発症の様子を検討した。脳血管障害と心疾患の併発が各1件増加した。糖尿病有病者は昨年と同じゼロであり、骨折に関しては有症率27.2%であった(図3)。

スモンの主症状について見ると、視力については発症後に様々な推移が見られるが、加齢とともに低下の傾向が示された。ほとんど正常が9.1%、新聞の細かい字レベルが36.4%、大見出しレベルが27.3%、眼前指数弁9.1%、眼前手動弁9.1%、評価不能9.1%であった(図4)。胃腸症状については、便秘36.4%、下痢9.1%、交代性36.4%、腹痛9.1%あり過去の検診においても同様の症状の持続が見られた。また、下痢と便秘の交代例の増加が見られた(図5)。

異常知覚については、じんじん・びりびり感が54.5%、足底付着感が27.3%の患者で見られ、病初期に比べれば症状は軽減しているものの残存している方が依

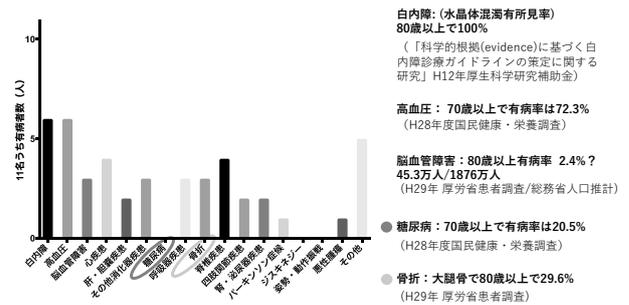


図3 検診患者11名の身体的併発症

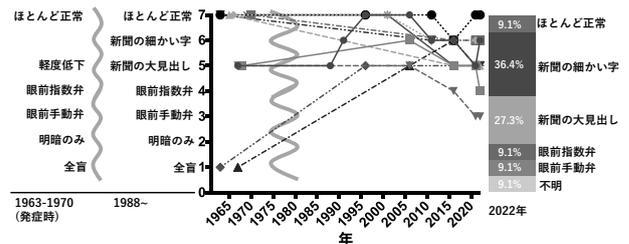


図4 令和4年度三重県スモン検診を受けた11名の患者の視力の推移

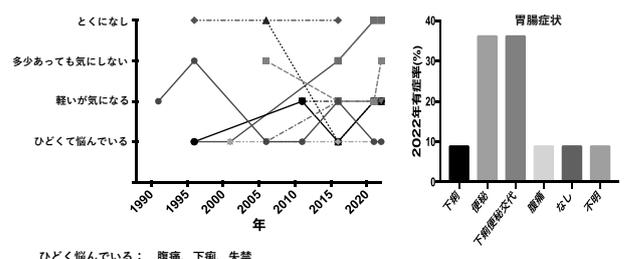


図5 令和4年度三重県スモン検診を受けた11名の患者の胃腸症状の推移

然多くみられた。昨年と著変は見られなかったが、認知症の進行にて評価不能となる例数が漸増しており27.3%が該当した（図6）。

歩行能力についても他の主要症状同様、症状極期から一定量回復後に加齢とともに再び低下してきていた。昨年より歩行レベルの低下が2名に見られ、つかまり歩き以下のレベルが8割を占めるようになった（図7）。

精神症候に関しては認知症の見られる患者が36.4%となり、自覚症状の評価が不能となりつつあることがわかった。また不眠が54.6%の患者に見られ、常に不眠が36.4%、時々不眠が18.2%、過眠が18.2%であった（図8）。

日常生活状況について Barthel Index を見ると、2016年以後に低下が目立ち、本年度も3名の患者の

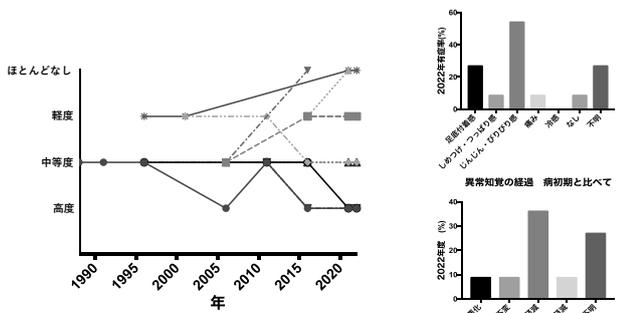


図6 令和4年度三重県スモン検診を受けた11名の患者の異常知覚の推移

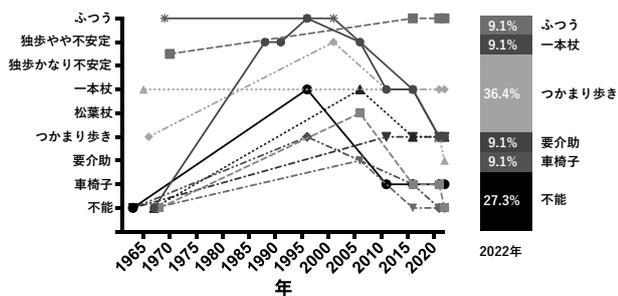


図7 令和4年度三重県スモン検診を受けた11名の患者の歩行の推移

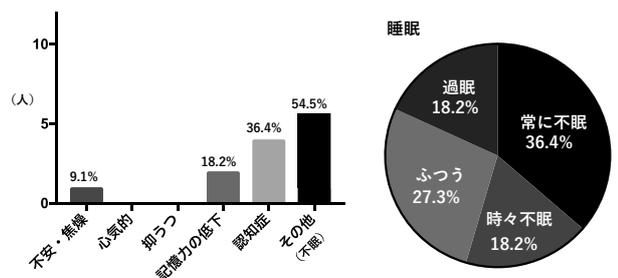


図8 検診患者11名の精神症候

低下が認められた。2名は歩行能力の低下、1名は便失禁によるものであった。64%の患者が少なくとも何らかの介助が必要で、36%の患者はほぼ全介助が必要な状態にあることが判明した（図9）。

生活の満足度の調査結果については、満足と言われる方が36.4%、なんともいえないという方が36.4%、不満足と言われる方が18.2%見られた（図10）。

D. 考察

全国の傾向と同様に、三重県における患者数は高齢化とともに漸減しているが、昨年と同じ11名の患者が検診を受診され受診率は68.8%となり維持された（図1、2）。

身体的併発症（図3）については、糖尿病有病者は昨年と同じゼロで、平成28年度国民健康・栄養調査による70歳以上での有病率が20.5%である。スモン患者の約80%が消化器症状を有しており2型糖尿病を発症しにくい可能性が示唆された。骨折に関しては有症率27.2%で、平成29年度の厚生省患者調査による80歳以上の一般高齢者の大腿骨骨折頻度29.6%と比較し同等と推察された。

スモンの主症状である視力障害、胃腸症状、異常知覚、歩行障害について、令和3年度までの5年ごとの推移に関する南山の前年度報告¹⁾と合わせて考察した。

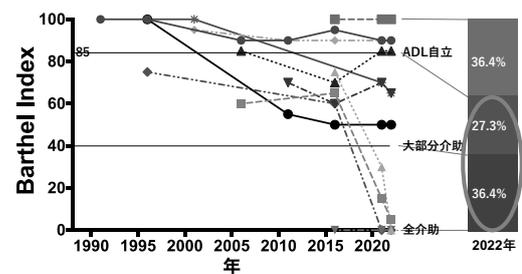


図9 令和4年度三重県スモン検診を受けた11名の患者のBarthel Indexの推移

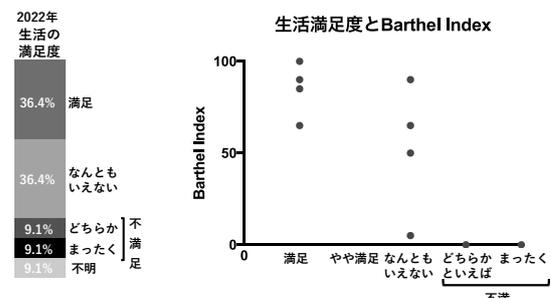


図10 令和4年度三重県スモン検診を受けた11名の患者の生活満足度

いずれも著変は認めないものの、認知症の進行により評価不能となる症例がここ数年で増加してきている(図4-7)。

不眠を訴える患者は54.6%に見られた。検診患者の平均年齢が85.2歳で直接の比較はできないが、60歳以上の一般人口での不眠症罹患率は29.5%²⁾という報告があり、不眠を訴える患者がスモンに多い可能性が考えられた(図8)。

Barthel Index(図9)については、緩徐な低下が見られこの1年でも3名の低下が見られた。スモン後遺症+加齢による歩行障害と胃腸障害が原因と考えられた。スコア85点未満でなんらかの介助を要するとされ、検診患者の64%が該当し、85点の患者を入れれば73%となる。

生活の満足度とBarthel Index(図10)とは相関しているように見えるが満足度を数値化して解析することはできず、「満足です」とBarthel Indexが比較的低くても満足と言われる方、「今さら痺れなんて」と言われ家族に支えられながら、満足度はなんとも言えないと仰る方もおられ、現状に耐えながら生活しておられる様子が伺えた。

E. 結論

本年度はスモン検診受診者の減少なく、コロナ禍ではあるが各保健所のご協力のもと直接の検診を全員に行うことができた。平均年齢は85.2歳となり、身体能力とともに日常生活レベルの低下が見られ、認知症にて自覚症状の評価が困難な患者が増加している。過眠を含めた睡眠障害をきたしている患者は72.7%に見られ、スモンの影響の可能性も否定できない。本研究は、現在生存されている比較的軽症の患者を見ているものと考えられ、スモン患者全体の病状と推移を捉えたものではないため留意が必要である。

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

I. 文献

- 1) 南山誠ら, 三重県におけるスモン検診患者の状況, 厚生労働行政推進調査事業費補助金(難治性疾患政策研究事業)スモンに関する調査研究 令和3年度 総括・分担研究報告書 p. 103-106, 2022
- 2) 小曾根基裕ら, 高齢者の不眠, 日本老年医学会雑誌 49 (3), p. 267-275, 2012